

出の測定が生きた労働の極値問題に従属していった結果であると考える。(p. 172~p. 197.)

私見：客観的評価によってきまる計画価格は、一般には、価値通りではない。天然生産手段、生産設備の現存量が制限的であるかぎり、価値から乖離する。この乖離は合法則的なものである。

問題はこの乖離が存在することを認めるということが労働価値説を否定することになるかということである。この問題に答えるためには労働価値説の核心が何であるかを明確にしなくてはならない。労働価値説の核心は諸価格が価値通りになることを主張するのではなく、商品形態をとって行われる社会的生産の分析を人間労働の1つの特殊な形態として分析することにあると筆者は考える。従って、客観的評価によってきまる計画価格が価値通りでないということは労働価値説を否定することではなく、この計画価格を労働価値説の立場から基礎づけることが必要なのである。この関係はちょうど生産価格に対するマルクスの分析と同じである。その際、投下労働によってきまる価値の概念が中核的な役割を果たさなければならない。価値規定そのものを放棄するノヴォジロフの見解はこの点で正しくない。 [置塩信雄]

ティルグベ・ホーベルモ

### 『投資理論の研究』

Tyrgve Haavelmo, *A Study in the Theory of Investment*, Chicago, The University of Chicago Press, 1960. pp. 221+viii

経済学の発展は、消費者行動についての巧妙な理論を展開することに成功した。理論と現実の間になお大きなギャップがあるとしても、少なくとも消費者の需要の問題に接近するための橋頭堡は、すでに確立されたようにみえる。これに比べ投資需要の理論は、非常に遅れている。投資函数について数多くの研究があるにもかかわらず、そこには、消費需要の分析にみられるような、比較的ととのった形での理論の発展と実証的分析の展開はなく、まさにケイオスの状態にあるといえよう。

T. Haavelmo はこのような状態を脱却して、投資理論の発展をもたらすためには、投資活動と経済行動に関する基本的法則の間関係を徹底的に追求しなければならないと考える。このような意図のもとに行われたのがこの投資理論の研究である。それは

I Survey of Problems, II Capital as a Factor of Production, III Savings and Investment in a

Centralized Economy, IV Investment Behavior in a Market Economy, という4つの部分から成り立っているが、問題のサーベイを行った第I編を除くと、オーストリアの資本理論を出発点として考察を展開する第II編、中央集権経済における貯蓄と投資を取扱う第III編、市場経済での投資行動を取扱う第IV編という3つの部分から成っている。これらの問題群は、一見それぞれが一応別個の独立した問題であるようにみえる。しかし、Haavelmo は、これらの部分で投資にまつわるいろいろの問題点を分析しながら、それらの検討を準備として正の資本蓄積の持続過程——投資は外的なデスターバンスがなくても持続的に正となりうる——の説明にせまるという方法をとっているように思われる。このプロセスにおける各部分、部分は、投資の研究に当たって遭遇する問題を、Haavelmo が彼なりに整理していった研究ノート集積であるということができよう。

まず、第II編では、Böhm-Bawerk—Wicksell の資本理論の検討から始めて、葡萄酒の生産で代表される pure aging process における資本要素、自然的成長過程での技術、連続的組立産業、大きな単位の生産——例えば建築——、倉庫在庫(Warehouse stocks)の生産性、生産手段の問題(ここに生産手段というのは、いわゆる固定資産に關係する)といった点が逐次検討される。連続的組立産業についての分析は、仕掛品在庫の分析ということができるし、倉庫在庫の問題は、製品・原材料在庫に關係するということができる。そして、さらに生産手段の分析は、固定資産關係のそれである。これらが、オーストリア資本理論の展開という形で行われる。そして生産要素としての資本について結論的に、彼は次のように考える。まず資本は『ストック』概念である。つまりそれは「単位時間当り」の何物かではなくて、「時点における量」というディメンジョンをもっている。したがって資本が生産に与える影響は、それが生産過程にあることによって発生する。(もちろん、このことは、すべてのストックが productive agents であるというのではなく、もし資本が生産性になにか關係をもっているとすれば、それは資本が生産過程に存在しているということから生れる何らかの用役にもとづくというにすぎない)。また資本がストック概念であることにより、資本を1つの生産要素とする上からは、耐久資本と非耐久資本を区別することは意味がない(減価償却は耐久資本財のこのような意味での用役とは必ずしも対応しない点を考えよ)。

第2の論点は資本の生産性に關係する。この点につい

て、オーストリアの資本理論では、資本をある意味で生産方法、すなわち迂回過程の特徴的徴候と同じものだと考える。このような図式の中では、資本を独立の生産要素と考える余地はない。オーストリア理論のいう、より迂回的な方法がより能率的であるのかどうかについて議論があったのだが、より迂回的な生産が必ずしもより能率的である必要はなく、より多量の資本は必要悪であって、より迂回的な方法が選択されるためにはそれはより能率的でなければならないというにすぎない。そしてこの場合、資本がどんな哲学的意味で生産的であるかに問わずらわされる必要はない。困難な問題が起るのは、迂回生産の考え方と近代的な生産函数の考え方を結びつけるときであり、このとき資本が生産物に体化されるということをもどんな意味で定義するかという問題に直面する。皮相的には、それは資本ストックの減価・減耗分であるとされるが、上述のように資本が生産過程にあるということによって生ずる用役こそ、それと考えられねばならない。この点は実は労働についても同様な問題が起る。

第3の論点は生産函数における1変数としての資本に関係する。この場合資本の役割が、生産函数中の資本量によって示されるかどうかという問題と、資本自体が1生産要素であるかどうかという問題を混同してはならない。組立産業での労働投入を考えてみると、産出量は一般に総労働時間だけでなく、その組立過程での分布にも依存している。同様なことが資本についても起るわけだ。

オーストリア理論はやや哲学的見地から資本が1生産要素であるという考えを無視し、他方近代の経済学者は、余りに多くの資本があるので資本を単一の生産要素と考えることは望みのないことだとするが、両者は、われわれの望みうるものは高々単純モデルであり、すべてを考慮したモデルではないということを忘れてる。

さて第Ⅲ編では、計画の動学を説明する1モデル、蓄積性向の構造変化、減価償却と純投資の概念、資本設備の最適耐久度、資本の輸入と輸出、技術変化の効果などの検討が行われるが、例えば資本の輸入と輸出の分析に典型的にみられるように、開放体系での中央集権経済の理論は、経済的目的、法制・制度上の framework などの相違を別とすれば、形式的には企業の理論と同様なものとなり、したがってこの編での研究の結果は、第Ⅳ編で市場経済での投資行動を分析する場合の準備となる。

第Ⅳ編では、まず市場経済の制度的 framework を設定した後、個々の生産者の資本需要、企業の投資行動、投資財の供給、投資と一般均衡、その巨視的モデル、投資と貨幣量・雇用量の関係、企業数の問題などが検討さ

れる。この編での Haavelmo の中心的な問題と思われる正の投資の持続という点に焦点を合せてみると、彼の主張は次のように考えることができよう。

企業者は諸価格や価格予想などの変化に対して使用資本量を調整しようとする。それによってたしかに投資(正または負の)が起る。しかし、このとき企業者の決意の底にある data の漸次的な変化、あるいは企業者自身の行動型の漸次的な変化がない限り、投資に対する連続的な需要の存在の特別の理由はなくなる。このことはたとえ調整の遅れという考え方をとり入れてみても同じだ。そこで Haavelmo は持続的な正の投資の発生を説明できるかという問題を投資を含む一般均衡(動学的均衡)の単純モデルの中で検討する。この分析は、資本財の耐久度の相違を考慮することによって複雑にされているが、この点についての議論を無視して、資本財の耐久度をすべて同一とすると、彼の議論を次のようにいうことができよう。所与の諸価格、利子率、賃金率および生産函数の下で、消費財、資本財それぞれの部門の、資本使用量と労働雇用量がきまり、したがって生産函数を通じて消費財、新資本財の生産量がきまる。期首の資本財存在量は初期条件として与えられているから、これと新資本財生産量の合計が、両部門の資本財需要量に等しくなるように資本財価格がきまる。また労働供給を実質賃金率(消費財で測った)の函数であるとすれば、消費財をニューメールとして選ぶと、その価格は常に1とおかれるので、先きの労働需要量の関係から賃金率がきまる。そして消費財需要を所得、利子率(その他の体系内の変数)の函数とすれば、以上のように考える限り消費財の需給で利子率がきまる。このモデルでは資本の増加が0でなければならないという理由は少しもない。つまり均衡に到達しても、それは正の投資を含みうるわけだ。(以上の一般均衡モデルの各変数の決定についての説明は Haavelmo の主張の筆者なりの解釈による)。

以上に述べたところからわかるように、Haavelmo のこの新著の中には、彼が投資の問題を考える当って直面した数多くの問題群について彼の解釈が示されている。たしかに、この書によって、直ちに投資の理論がいままでの状態を打破って、大きく1歩前進したとはいいがたい。しかしながら、この書を読む人は、安易に投資函数を設定して、その計測に進むといったやり方について反省させられ、そして企業の投資行動の分析の中に、いかに多くの困難な問題群が含まれているかを思い知らさせられるであろう。

〔藤野正三郎〕